





補血薬



本類薬物主治面色萎黄（顔色が良くない）或無華、唇甲蒼白、頭暈（頭がまわる感覚） 眼花（眼がかすみちらちらする） 心悸失眠等、大便乾燥、婦女月経量少淡、脈細数或いは細洪、舌質淡紅、舌苔滑少津等症。 眩 = 眼花（目がかすみちらちらすること） 暈 = 頭がまわる感じがするもの

生薬	源基	性能	帰経	治	臨床応用	代表薬劑	用量、禁忌
当归(トウキ) 	セリ科の <i>Angelica sinensis</i> DIELS の根	甘・辛・苦 / 温	心・肝・脾	補血調血 活血 行気止痛 潤腸通便	血虚萎黄、頭暈、眼花、月経不順、痛経（生理痛） 大出血の後あるいは気血を伴うとき 虚寒による腹痛、冷え 気滞瘀血による疼痛		
	帰頭（根頭部） 当归身（主根部） 当归尾（支根） 全当归（帰身 + 帰尾）の区別あり						

血病の要品

（血分有用に最適）

					大腸湿熱による腹痛・下痢・テネスマス 小便不利 血虚の血脈不利（血痺）	芍薬湯 真武湯 黄耆桂五物湯	
阿膠(アキョウ)  滋陰補血・止血の要薬	ウマ科の口バ <i>Equus asinus</i> L. やウシ科のウシ <i>Bos taurus</i> L. var. <i>domesticus</i> GMELIN などの除毛した皮を水で煮て製したニカワ塊	甘・平 / 粘	肺・肝・腎	補血 滋陰 止血 清肺潤燥	血虚による眩暈、心悸などの病証 陰虚火旺による煩躁、不眠、熱感などの病証 熱病による傷陰（真陰損傷）或いは慢性病の肝腎陰虚のため身体の熱感、手足のほてり、盗汗、筋ひきつりなどを呈する 吐血、衄血、血便、不正性器出血など多種の出血 肺陰虚の乾咳、少痰、血痰 燥熱傷肺の乾咳。呼吸促迫、無痰、口渴等の症候	配当帰、熟地黄、白芍、黄耆 黄連阿膠湯 加減復脈湯 大定風珠 阿膠鶏子黄湯 芎帰膠艾湯 両地湯 寿胎丸 補肺阿膠湯 清燥救肺湯	6~15g 冲服 粘膩の性質が強い ため脾胃虚弱には禁忌
熟地黄（ジュクジオウ）  滋陰養血 + 生精補髓生骨	ゴマノハグサ科 のジオウ <i>Rehmannia glutinosa</i> LIBOSCH や、カイケイジオウの肥大根を乾燥したのち、酒で蒸して熟製したもの	甘 / 微温 / 粘膩	心・肝・腎	養血滋陰 補腎益精	血虚による萎黄、眩暈、動悸、不眠、月経不順、崩漏（不正性器出血）月経痛などの症候に用いる 腎陰虚による腰膝酸軟、遺精、骨蒸潮熱、盗汗 精血両虚による頭暈眼花、耳鳴耳聾、髪早白	四物湯 人參養榮湯 補血湯 六味地黄丸 左帰丸 大補陰丸 首烏延寿丹 虎潜丸	9~30g 煎服 粘膩で消化が悪い ため、脾胃虚有湿、痰多気滞、食少便溏には用いない
龍眼肉(りゅうがんにく)  滋補（気血）の良薬	ムクロジ科のリユウガン <i>Euphoria longan</i> STEUD の果肉	甘 / 平	心・脾	養心血安神 補脾気	心脾両虚による動悸、不眠、健忘、食欲不振、倦怠無力感などの症候に用いる 労傷心脾による驚悸怔忡（驚き易い） 失眠、健忘、食少体倦にも適する。	帰脾湯 （一般の気血不足に単味使用可能）	6~12g 煎服 湿阻中焦・停飲・痰火には禁忌
何首烏(カシュウ)	タデ科のツルドクダミ <i>Polygonum multiflorum</i>	苦・甘・渋 / 微温	肝・腎	補肝腎 益精血	肝腎精血不足による頭のふらつき、目のかすみ、早期白髪、腰膝酸軟、肢体痺れ、遺精等の症候に用いる	七宝美粧丹 烏髮丸	

 <p>滋補の良薬</p>	<p>THUNB の塊根</p>			<p>生発烏髪 截瘡 解毒 潤腸通便</p>	<p>久虧（慢性に反復する悪寒・発熱の発作） 皮膚化膿症 慢性瘡病(マラリア)、瘰癧(頸部リンパ結節)、 精血不足、腸燥による便秘</p>	<p>補血生髮湯 何人飲 何首烏散 当帰飲子 配合夏枯草,土貝母,香附子(瘰癧) 配合当帰,麻子仁,胡麻仁</p>	
<p>夜交藤(ヤコウトウ)</p> 	<p>タデ科のツルドクダミ <i>Polygonum multiflorum</i> THUMB の蔓性茎</p>	<p>甘・平</p>	<p>心・肝</p>	<p>養心安神 養血通絡 祛風止痒</p>	<p>心血不足による不眠、多夢、焦躁等の症候 血虚による全身のだるい痛み 皮膚の掻痒症</p>	<p>甲乙帰蔵湯 配当帰、熟地黄、鶏血頭 単身の煎汁で患部を洗う</p>	<p>15~30g 煎服 外用は適量</p>

補足説明：当帰を中心に説明いたしますので、他の薬剤は同様に理論的に考えてみてください。

まず血虚証を理解するためには、体内の奇経八脈に属する衝脈と任脈を理解することが重要です。衝脈は全身の陰脈を統攝する役割があり、婦人の月経の発生と胎児の発育と関係しています。このため血海としての役割を担っています。任脈は胞体を主とします。衝脈が虚損であれば生理量は減り、色は淡く生理が遅れます。さらに下焦に寒滞があれば少腹が痛くなります。もし脾虚で摂血ができず腎虚で衝任不固であれば漏中漏下等の証を引き起こします。経脈の走行は、教科書で良く確認しておいてください。

当帰の薬理作用は、その性能から理解できます。甘で補う作用を持ち、辛で散の作用を持ち、苦で泄の作用を有し、温で通す作用があります。当帰の帰経を見ると、心、肝、脾になっています。心は主血、肝は蔵血、脾は統血の作用があることを思い出してください。いずれも血と関係のある臓器に帰することが分かります。さて当帰は場所によって異なる名前がありますが、それは場所によって作用の強弱が異なるためです。すなわち当帰身は補血作用が強いので補血を目的とするときに用い、同様に当帰尾は活血に用い、全当帰で和血に用いられます。また通経活血を期待する際は、酒で炒した酒当帰を、潤腸作用を期待するときは、生当帰を用います。

血虚の基本方剤は四物湯です。本方剤には地黄、当帰、白芍、川芎の4剤からなります。これにそれぞれの証にあわせ加減していくのが基本となります。そこで少しだけ四物湯の解説をいたします。君薬は地黄で補血の作用を持ちます。臣薬は当帰で補血・活血の作用を持って君薬を助けます。佐薬は白芍と川芎で前者が斂陰養血、後者が入血分理血中之気の作用を持ちます。

当帰の方剤の中には逐瘀湯という名前の方剤がいくつか見られます。いずれも理気剤であり、作用的には血の流れを良くし(活血)瘀血を取り除く、気の流れを良くし(理気)痛みを止めますが、標的場所が異なり、それが使い分けになりますので覚えておいてください。血府逐瘀湯は胸中の痛み、隔下逐瘀湯は脾胃肝部の痛みに用い、少腹逐瘀湯は下腹部の寒による痛みに用います。なお頭の瘀血による痛みには少し名前が違いますが、通翹活血湯を用います。いずれにせよ中国では気や血の流れが滞ることにより痛みが発生すると考えていますので、そうした痛みには理気剤や活血剤を用い、寒が絡んでいれば温性の薬剤を加え、虚証があれば補剤を加えます。